

第2章 古墳をめぐる環境

1 古墳群の位置と地形

廻原1号墳は島根県松江市朝酌町に所在し、入海とかつて呼ばれた中海と宍道湖とを結ぶ大橋川の北岸、さらには島根半島と中国山地が接する場所にある(第1・3図)。古墳のすぐ南側においては、一級河川である大橋川とその北側の剣先川、さらに北側にある朝酌川が並行して東流し、3本の河川は中洲となる松崎島近辺で合流する。そこから大橋川はいったん南へ蛇行してもっとも川幅を狭くしており、3本の河川の合流地点の北側には、沖積地が形成されている。廻原1号墳はこの沖積地を介して、和久羅山(標高262m)から南へと舌状に伸びる低丘陵の先端付近にある緩斜面が形成する浅い谷奥部に位置する(図版1)。和久羅山とその北にある嵩山(標高331m)の南側においては沖積地が限られているなかで、古墳の所在する付近の沖積地は周辺では比較的広い面積をもち、嵩山の麓まで平野部が北東側からまわり込むようにおよぶ。そして、この朝酌地域の平野部の西方に位置する西尾地域にも、和久羅山から南西に伸びる低丘陵を介して、緩斜面と平野部が形成されている。さらに、朝酌地域の東方、福富地域から大井地域にも平野部は展開する。朝酌地域とは東側に位置する丘陵によって画されるが、大橋川を介して地理的には近い関係にある。

上述した地形的な様相に加えて、廻原1号墳をはじめとする大橋川北岸の古墳を考えるうえでは、付近の地質的な特徴もみのがすことはできない。古墳の北側にある和久羅山と嵩山の周辺には、主として後期中新世から前期鮮新世の火山岩類が分布しており、それらは「和久羅山安山岩」〔応地・応地1966〕あるいは「和久羅山デイサイト」〔佐藤・松本・亀井2011〕と呼称される、緻密かつ堅固な岩質の石材である。地形的には、和久羅山と嵩山の山体中心部から西側が急斜面をなし、東側は傾斜が緩やかとなっており、それに地質的な傾向もある程度対応する。「和久羅山安山岩」ないし「和久羅山デイサイト」は、肉眼観察により色調が暗灰色、黄灰色、赤褐色に分類され、廻原1号墳が位置する和久羅山と嵩山の西側においては、赤褐色を呈する石材が分布する。(岩本)

2 周辺の遺跡(第3図)

縄文時代 廻原1号墳の周辺において、旧石器時代の遺跡はいまのところ明らかとなっておらず、人類の活動痕跡は縄文時代以降に確認できる〔宮澤ほか2011〕。朝酌地域西側の西尾地域では、鞍切遺跡において落とし穴3基が検出され、安山岩製スクレイパーが出土している。山辺遺跡においても、竪穴住居と指摘される楕円形プランの落ち込みから黒曜石製石器が出土している。このように周辺の縄文時代遺跡は断片的だが、朝酌川をさかのぼった中流域では、遺跡の形成と継続が比較的明瞭かつ時代を通じて長期におよぶ。西川津遺跡、原の前遺跡、タテチョウ遺跡からなる西川津遺跡群(朝酌川流域遺跡群)では、住居など居住活動を反映する遺構は不分明ながらも、土坑や溝状遺構とともに杭列などが自然流路とともに確認されており、水辺を生活領域にとりいれたようすをみてとれる〔島根県教育委員会1979～1992・1980～2003ほか〕。西川津遺跡群の西側にある島根大学構内遺跡でも、「縄文海進」期の古宍道湖湾ならびに古宍道湖最奥部付近の水辺の様相が垣間みえる〔島根大学埋蔵文化財調査研究センター1997～2005ほか〕。また、大橋川から中海に達した北側の大井地域では、九日田遺跡において縄文時代後期の貯蔵穴や土坑が多数検出されている〔岡崎2000〕。

弥生時代 朝酌地域周辺の弥生時代遺跡は少ない。大橋川北岸という視野からみても、ようやく朝酌川を北上した地点にあるタテチョウ遺跡、西川津遺跡などが知られる程度である。タテチョウ遺跡、西川津遺跡とも弥生時代前期から後期におよぶ、長期にわたって形成された島根県屈指の弥生時代遺跡である。明瞭な遺構が確認されたわけではないが、出土遺物の数量や内容などから、いわゆる拠点集落と称されるような大規模集落遺跡が近傍に存在する可能性を想定できよう。

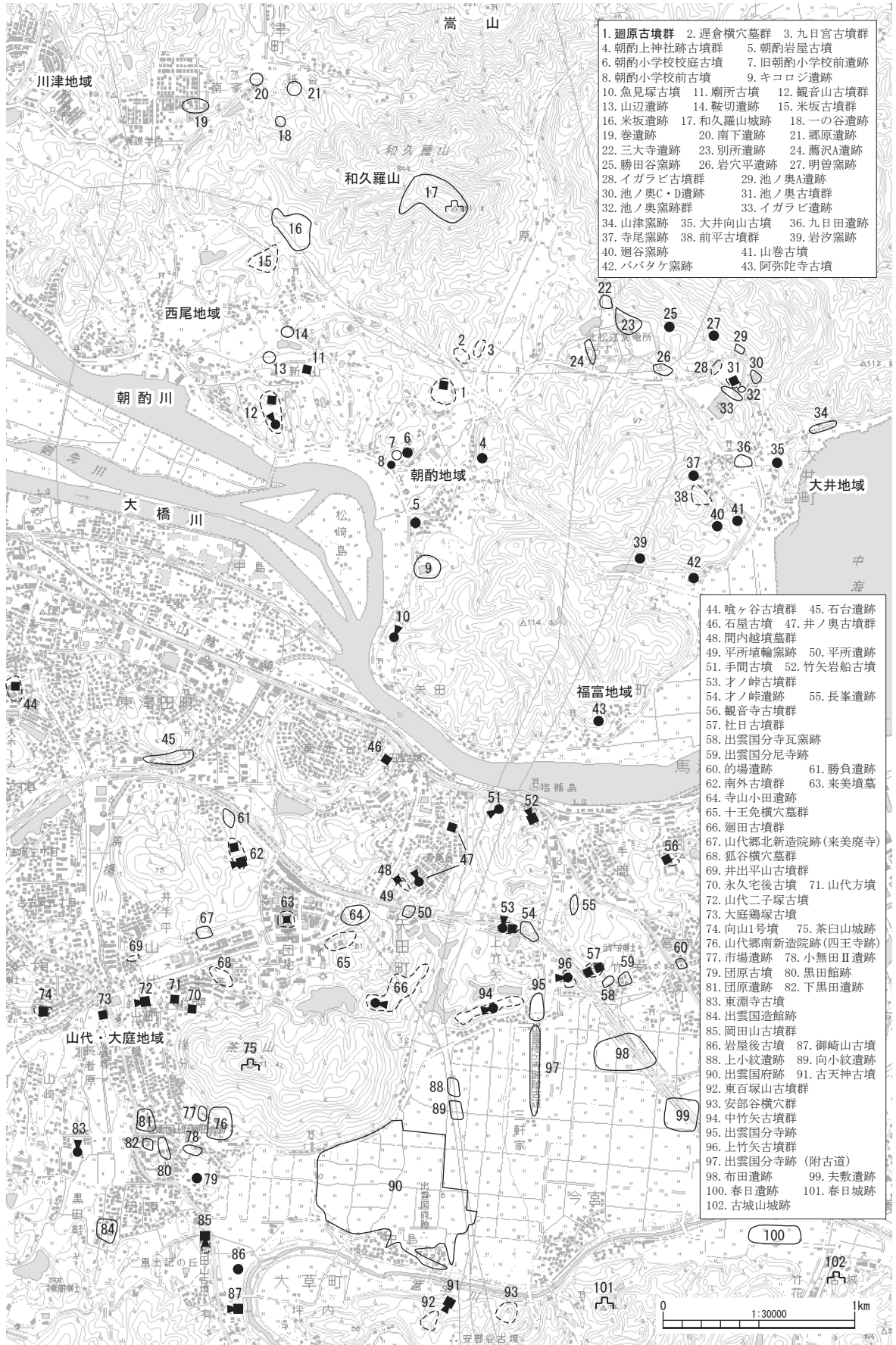
古墳時代 古墳時代に至ると、朝酌地域と周辺域でも遺跡数が増加する。当地において首長墓の築造が活発化するの、廟所古墳（造出付方墳 82 m）と観音山 1 号墳（方墳 40 m）の築造が契機となる。いずれも窖窯焼成の埴輪が出土し、古墳時代中期中葉の築造である〔増田ほか 2004、池淵ほか 2012〕。大橋川南岸にも荒神畑古墳（方墳 30 m 弱）と石屋古墳（方墳 42 m）があり、中期中葉という時期に近接した場所において大型方墳が集中する。その後、中期後半から後期前半には、朝酌地域を中心とした大橋川北岸域での首長墓の築造は目立たない。この時期には、西尾地域の米坂古墳群にみるように、10 m ほどの方墳を主体とする古墳群が形成される〔江川 1999、宮澤ほか 2011〕。米坂古墳群中には須恵器の不良品を床面に敷き詰めた箱式石棺が確認されており、須恵器工人との関連性を想定できる。大井地域ではこの時期以降に須恵器生産が始動しており、時期的一致をみせる。

後期後半の首長墓としては、魚見塚古墳（前方後円墳 62 m）が特筆される。出雲地域では数少ない後期前方後円墳であり、出雲型子持壺が出土している。なお、魚見塚古墳の大橋川を介した南岸には、手間古墳（前方後円墳 61 m）があり、ほぼ同時期の築造であるなど〔渡辺（編）2002〕、大橋川沿岸における造墓活動は該期にふたたび活発化する。朝酌地域において廻原 1 号墳に先行する首長墓としては、朝酌岩屋古墳（方墳 30 m か）と朝酌小学校校庭古墳（墳形規模不明）、やや距離をおいた東方の福富地域の阿弥陀寺古墳（墳形規模不明）があり、いずれも出雲型石棺式石室を埋葬施設とする〔出雲考古学研究会 1987〕。このうち、玄室平面形態が平入りの横長長方形をなし、玄門を複数の石材で構成する朝酌岩屋古墳がもっとも古く、朝酌小学校校庭古墳、阿弥陀寺古墳の順に新相を示す。このように、おおよそ後期後半から終末期にかけて、大橋川北岸では首長墓の築造が継続する。なお、朝酌岩屋古墳と阿弥陀寺古墳にみる、石棺式石室に安来市域から搬入したいわゆる荒島石を用いる状況は、廻原 1 号墳にも引き継がれており、広域におよぶ地域間交流が継続する点でも興味深い。

こうした朝酌地域における後期から終末期⁽¹⁾にかけての首長墓の継続的な築造は、山代・大庭古墳群にみる山代二子塚古墳（前方後方墳 94 m）→山代方墳（方墳 45 m）→永久宅後古墳（方墳か）という、出雲東部地域の最有力首長墓が築造される動きとも無関係ではない。朝酌地域から山代・大庭地域へは南西へ直線距離でおよそ 4 km という位置関係にある。『出雲国風土記』には、出雲国庁から島根郡家を経由して、隠岐国への渡海点となる千酌駅家へ向かう枉北道沿いにあったとされる朝酌渡の存在がみえる。朝酌郷・朝酌促戸条をめぐる記述から、朝酌地域が出雲の古代地域社会における水陸の交通の要衝とみられる点は〔森田（編）2000 ほか〕、古墳時代における出雲東部の中枢ともいえる山代・大庭古墳群と朝酌地域との関係を理解するうえでも一定の示唆を与える。

後期後半から終末期における朝酌地域と周辺の様相として、いま一つ注目しておくべきは群集墳の存在である。朝酌地域の廻原古墳群、九日宮古墳群、東方の大井地域のイガラビ古墳群、池ノ奥古墳群、大井古墳群、イズキ山古墳群には、和久羅山・嵩山由来の安山岩を用いた横穴式石室からなる古墳群がある〔出雲考古学研究会 1987、岡崎ほか（編）1990〕。朝酌上神社跡古墳も、同様の古墳群をなす事例であろう。これらの古墳群では、石棺式石室を模倣したと考える横穴式石室があり、首長墓と群集墳の関係に迫る材料となる。文献から朝酌地域が千酌地域とかかわりのある可能性を上述したが、石棺式石室を模倣したとみられる横穴式石室が千酌地域の岩山古墳群に存在する点にも注目しておき

た



第3図 廻原1号墳周辺の遺跡

い。なお数は少ないが、朝酌地域では遅倉横穴墓群において5基の横穴墓も知られている。

後期以降の朝酌地域とその周辺には、墳墓以外の生産関連遺跡や居住関連遺跡も確認されている〔松江市史編集委員会（編）2012ほか〕。生産関連としては、大井窯跡群での須恵器生産が特筆される。朝酌地域から大井地域の丘陵地帯にある、薦沢A遺跡や別所遺跡といった後期後半から終末期の大井窯跡群にかかわる居住関連遺跡も、地域社会構造を把握するうえでは貴重な情報をもたらす。

奈良・平安時代 奈良時代以降は、おおむね古墳時代後期から始動する大井窯跡群での須恵器生産が、朝酌地域とその周辺域の位置づけを考えるうえでやはり重要である。その操業はおおむね平安時代前期（9世紀）まで継続し、7世紀から8世紀前半までは出雲国の他地域では窯跡の存在が明らかとなっておらず、須恵器は大井窯跡群において集約的に生産されていたとされる。また、大井窯跡群に関連する居住関連遺跡の、薦沢A遺跡やイガラビ遺跡、池ノ奥A遺跡、池ノ奥C・D遺跡、三大寺遺跡では、加工段に掘立柱建物が存在したものとみられている。廻原1号墳の南方に位置するキコロジ遺跡では木製品生産・加工にかかわる遺構と遺物が確認されており〔江川（編）2011〕、須恵器生産だけでなく、多様な手工業生産と朝酌地域が関連性をもっていた可能性がうかがわれる。

朝酌の地域的特質と廻原1号墳 先にもふれたが、朝酌地域の特質がもっとも顕著にみえるのは、『出雲国風土記』朝酌郷・朝酌促戸条の記載である。そこには「東に通道があり、西に平原がある。中央は渡し場である。」と記され、朝酌地域が水陸交通の要衝であったことがわかる。あわせて、笠漁をはじめとする多様な漁業のようすも記述されており、物資流通の起点となる市が存在したであろう記載もある。大井地域の須恵器生産をはじめとする手工業生産、汽水を生かした漁業、市の存在や水運・陸運による交易など、産業と流通の起点として朝酌地域が出雲古代社会において一定の特質ある役割を担っていたであろう点は、廻原1号墳の築造背景を考えるうえできわめて重要な意味をもつ。

朝酌地域においては古墳時代後期・終末期に至って遺跡の形成が顕著となり、それは隣接地域にある大井窯跡群の操業開始とも深くかかわる可能性が考慮される。また、首長墓に採用される石棺式石室の石材にいわゆる荒島石が使用される点からも、出雲東部の広域におよぶ交流が当地における遺跡形成の大きな契機となっていたと考える。そして、朝酌地域が広域交流の起点としての位置にあった点は、『出雲国風土記』の記述にも端的にうかがわれるのである。朝酌地域には、産業・物資流通の拠点、水運・陸運の結節点として交通要衝を担ったという地域的特質を指摘できよう。（岩本）

3 調査と研究の歩み

（1）廻原1号墳の調査・研究

ここでは、2009年度にはじまる廻原1号墳の調査に先立っておこなわれた調査・研究の歩みを概観し、廻原1号墳が占める研究史上の位置を確認しておきたい。

調 査 廻原1号墳についてはじめて考古学的な所見を提示したのは、梅原末治である。梅原は「横口式石棺」として、埋葬施設の実測図を提示しつつ（第4図）、「古墳の外形は」「円を呈」すること、棺が「妻入の位置に羨道部の奥に造り付けられ」と報告した〔梅原・石倉1920〕。提示された埋葬施設の実測図では、幅の広い羨道が付属すること、石棺の蓋石が羨道天井石より高い位置にある点、石棺の南小口の前面に羨道壁体が位置するように表現される点が注目される。

その後、1972年ごろに島根大学考古学研究会が、廻原古墳群の分布調査、1号墳の墳丘測量図作成、埋葬施設の実測図作成を実施した。50cm間隔の等高線による墳丘測量図と、埋葬施設の平面図と東側壁立面図、南小口内外の立面図が提示された（第4・5図）。そのうえで、墳丘がおよそ一辺10m、

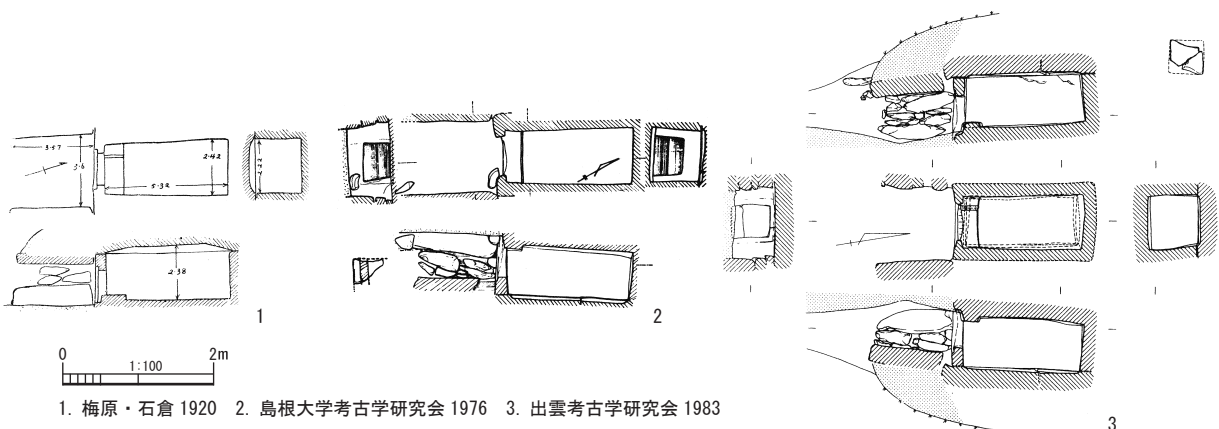
高さ3mの方墳であることが示された。また、「妻入式家形石棺に羨道部を取りつけた特殊な横穴石室」、凝灰岩を用いること、同石材の閉塞石の存在も指摘された〔島根大学考古学研究会 1976〕。

1980年には出雲考古学研究会により、測量図と埋葬施設の実測図が作成された。25cm間隔の等高線による測量図、埋葬施設は平面図・東西側壁立面図・南北小口立面図が提示され、基本的な情報が整備された(第4・5図)。新たな所見として、墳丘が谷奥の後背部を削り出す山寄せの方墳である可能性、横口式石槨の前方に羨道を付すこと、玄門に閉塞石を受ける割り込みをもつこと、床面の南側に段差があり、そこに断面V字状の排水溝を設けることが指摘された。羨道には自然石や割石を粗雑に積み、天井石に一枚石が用いられていると報告された〔出雲考古学研究会 1983・1987〕。

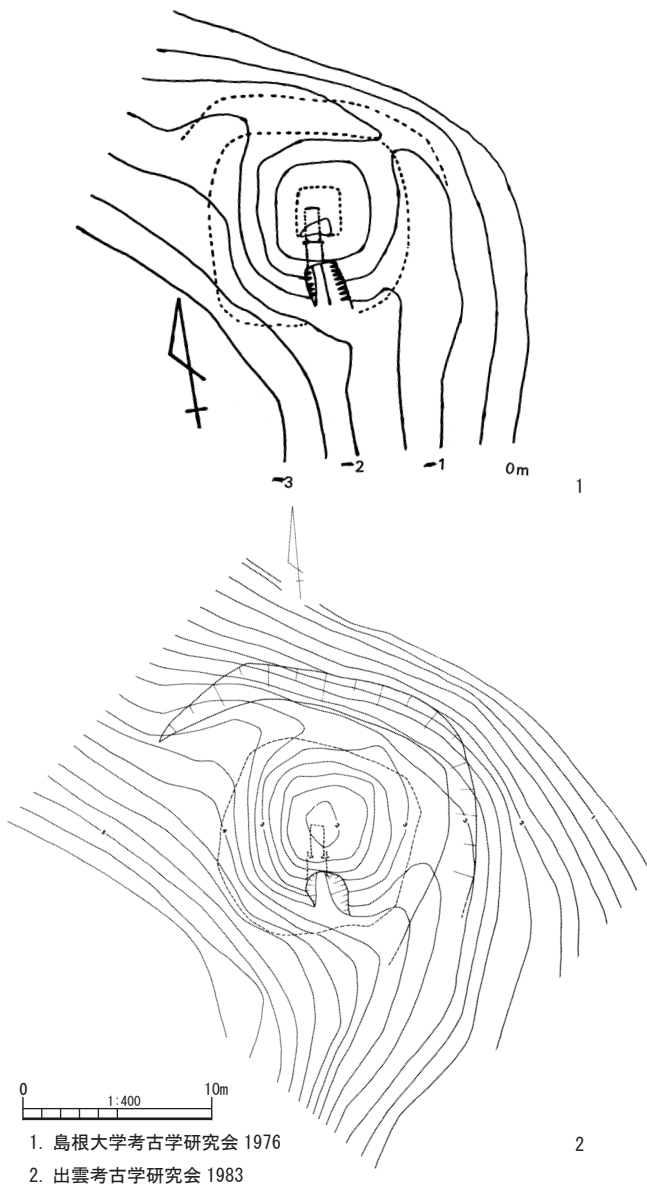
また、1989年12月にも内田律雄、曳野律夫、守岡正司、磯村賢治の諸氏により、墳丘測量調査と埋葬施設の実測図作成がおこなわれており、継続的に調査の対象とされてきたことがうかがわれる。

研究 廻原1号墳の評価は、1920年の「河内の諸地方に其の例を見る所謂横口式石棺と構造の頗る近似を見」とした、梅原末治の埋葬施設にたいする指摘を嚆矢とする〔梅原・石倉 1920〕。その後、1964年に山本清は「身は削り抜きで、石棺式石室としては異例で、また形の小さ」なものであり、「石室というよりは石棺と呼ぶにふさわしい」とした〔山本 1964〕。1970年には東森市良が、梅原の所見を踏襲しつつ、「径約8m、高さ約3mの円墳」であると述べ、埋葬施設は「石棺式石室」とした〔東森 1970〕。これらの先行研究により、まず埋葬施設の大枠の評価が定まったのである。

そして、出雲考古学研究会による石棺式石室の体系的な研究により、その位置づけはさらに具体的となる。1983年に埋葬施設の特徴として、「玄門部に閉塞石を受ける割り込みを有する」こと、「割り込みは、(中略)「石棺式石室およびその系統」とされる石室の玄門にみられる手法である」こと、「類例が大阪府富田林市お亀石古墳にみられるが、(中略)玄門部閉塞部の構造、地元軟質石材の使用など地域的特色」の存在が指摘された。そのうえで、「廻原1号墳は7世紀第2四半期とみられるお亀石古墳より、やや新しい時期に位置づけられ」とした〔出雲考古学研究会 1983〕。さらに、「畿内の石槨とは形態では類似しながらも、削り抜き玄門や閉塞石を受ける割り込みをもつなど、石棺式石室の手法をも受け継いだ構造をとる」と述べ、「畿内の石槨に酷似し、7世紀のほぼ半ば頃」に位置づけうるとした〔赤沢・広江 1987〕。また、「畿内の横口式石槨と極めて類似する」という点が強調され、「イガラビ古墳群の調査により、朝酌型石室に継続して縦長の石室が現れ、さらに非常に小形の単葬墓に変化し」、そうした「変化は、畿内系の横口式石槨の出現と密接な関係がある」ことなども指摘された。ここに、廻原1号墳が在地の横穴式石室に影響を与えたという理解が提示されたのである〔桑原・丹羽野・角田・西尾 1987〕。



第4図 廻原1号墳にかんする過去の調査記録(1)



第5図 廻原1号墳にかんする過去の調査記録(2)

年代については、「大阪府お亀石古墳の石室に類似し、時期は七世紀中頃」という理解〔西尾1995〕、「大阪府鉢伏山西峰古墳に類似することから、7世紀中葉ごろ」とする考え〔松本1997〕が示された。畿内地域の横口式石槨との直接的対比により、7世紀中頃という年代観が浸透していった。

また、廻原1号墳を起点に在地の石室が変容するという認識も一定の位置を占める。大谷晃二は、「石棺式石室が」「畿内の横穴式石カク」「などの影響で、縦長プラン」「へと変化し、消滅する」とみた。具体的には廻原1号墳を介して鏡北廻古墳や若塚古墳の石棺式石室の変容形態が生み出されると評価した〔大谷1996〕。同様の理解は、「7世紀中頃になると、廻原1号墳の主体部に畿内系の横口式石槨が採用され」、「その影響を受けたものと考えられる石室がいくつか認められる」という記述にもあり、影響を受けた具体例に、鏡北廻古墳と若塚古墳があげられている〔角田・守岡・原田1997〕。

その後も、廻原1号墳が畿内地域との直接的な影響下で出現したという理解は大勢をなす。「畿内の横口式石槨を埋葬施設とする方墳」という認識〔仁木2003〕や、「玄室が大阪府観音塚西古墳に類似する横口式石槨であり、若塚古墳と同様の時期(=飛鳥ⅡないしⅢ)と判断される」という評価〔大

谷2009〕、さらには廻原1号墳を出雲唯一の横口式石槨墳としてとりあげ、国府造営にかかわった官人層の墳墓である可能性も想定されるに至っている〔脇坂2008、大谷2009〕。「7世紀後半段階には」「廻原1号墳のような横口式石槨を内包する外護列石を有した方墳が築造され」たのち、「在地の石棺式石室が単葬用に小型化したものや、横口式石槨の影響を受けたもの」となるという見解〔仁木2010〕からも、廻原1号墳の研究史上の位置づけはほぼ定説化した感がある。

小 結 廻原1号墳にたいする評価は、墳丘の情報が限られるため、必然的に埋葬施設にかかわる内容が目立つ。埋葬施設について畿内地域との関係性の度合いをいかに見積もるかは諸研究において差があるが、総体としてはより直接的な結びつきが想定されている。

ここで確認しておきたいのは、廻原1号墳がそのほかの石棺式石室の変化を促すこととなる画期的な存在であるという評価であり、その在地における影響力の大きさが強調されてきたという点である。また、その年代についてもおおむね共通の理解が得られているようであり、畿内地域の横口式石槨との直接的な対比からおおむね7世紀中頃から後半に位置づけられている。(岩本)

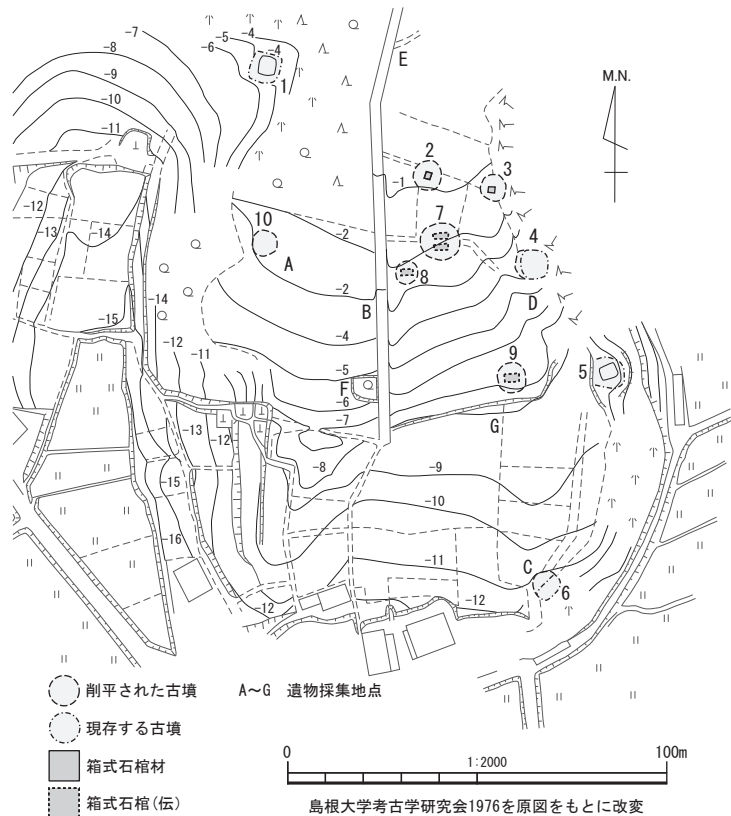
(2) 廻原古墳群の構成

和久羅山から南に伸びる低丘陵の緩斜面上に複数の古墳が分布して廻原古墳群を形成する。1号墳はそのなかでも谷奥に位置する（第6図）。

開墾にともなう3度の破壊により、尾根上に位置する9基の古墳が削平されたと報告される〔島根大学考古学研究会1976〕。2・3・5・6・10号墳の5基に、箱式石棺とみられる石材が確認されている。4・6号墳は墳丘の一部が残存するが墳形は不明である。7～9号墳は消滅したが、箱式の棺の存在が伝えられる。9号墳からは須恵器と鉄刀が出土したという。

現在、島根大学法文学部考古学研究室には、考古学研究会が表採した4点の須恵器が所蔵される。A地点の坏蓋と2号墳頂上の坏身は出雲3期にあたる〔大谷1994〕。採集地点の不明な坏身2点は、それぞれ出雲3期と出雲5期とみられる。6号墳では出雲2～4期とされる蓋坏、10号墳では出雲2期ごろの坏身が表採されたという。

廻原古墳群は、現存資料と伝聞によるところが多いが、おもに須恵器編年でいう出雲3～5期、つまり古墳時代後期を中心として終末期にかかる時期の丘陵尾根上の古墳9基以上と、丘陵西斜面谷部の1号墳からなる10基以上の古墳群であったと推定される。（磯貝）



第6図 廻原古墳群の構成

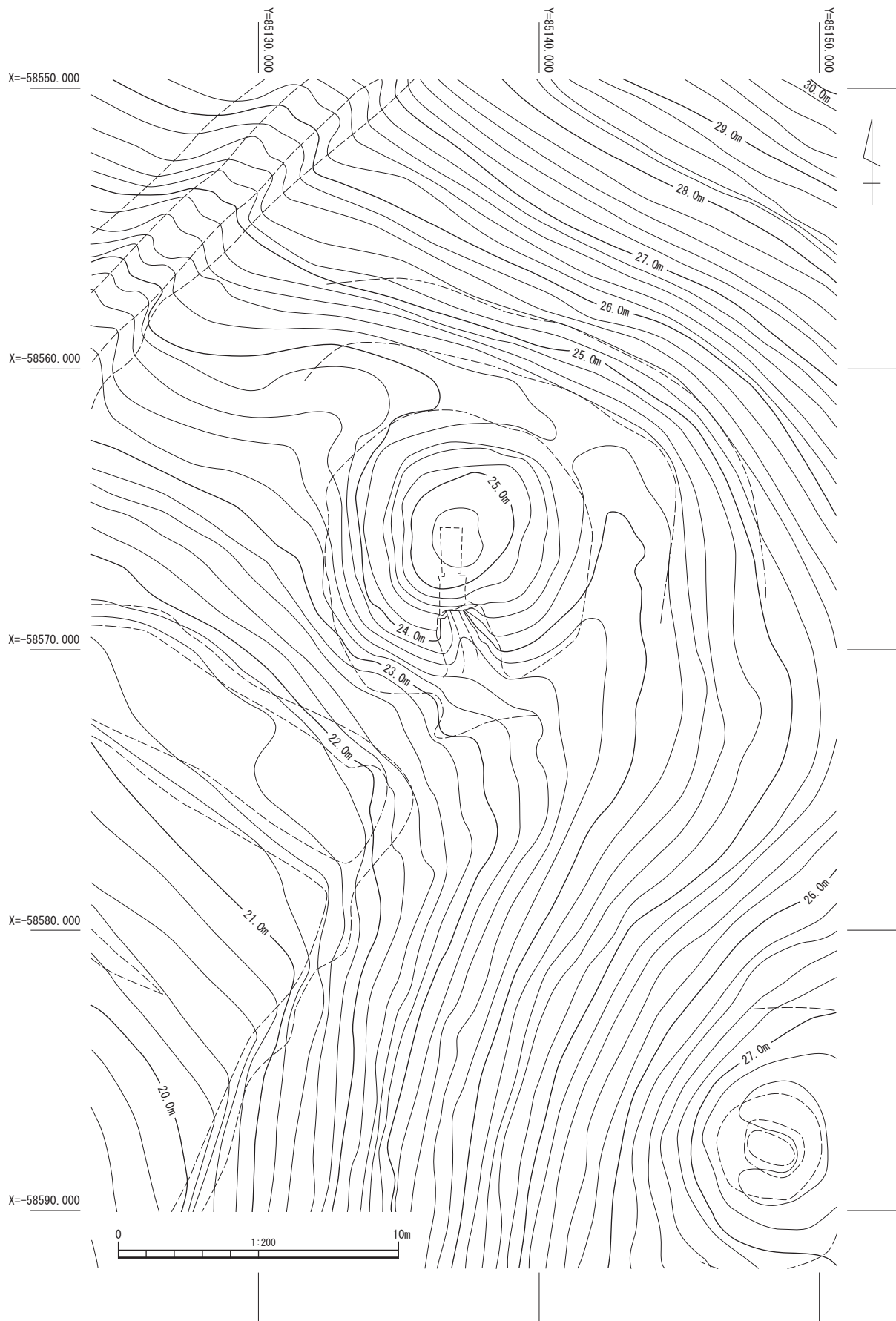
4 古墳の現状—測量調査—

このたびの一連の調査に着手するにあたって、まずは古墳の現状を周辺地形も含めて把握する必要があると考え、20 cm間隔の等高線による測量図を新たに作成した（第7図）。

墳丘 墳丘の南側に埋葬施設がすでに開口した状態にあり、その主軸は座標上の南北とほぼ一致する。埋葬施設は羨道より南側が埋没し、全体像は明らかでない。

墳丘最高所は、埋葬施設の中心とほぼ重なる位置の墳頂部にあり、標高は25.305 mである。墳丘裾はもっとも低い南西側で標高22.8 m付近、もっとも高い北東側で標高24.2 m付近にある。墳丘斜面の傾斜は西側から南側が強く、北側から東側は緩やかであり、斜面に段築はみられない。外表施設となるような石材の露出も確認できず、段築はもとより外護列石や葺石の有無も不明である。

墳丘と埋葬施設の中心がほぼ重なり、埋葬施設の主軸と墳丘の直線的な等高線の方向が平行ないし直交する。こうした点から、墳丘規模は10 m程度、墳丘形態もおおまかに方墳を指向するものと想定される。ただし、方墳と想定した際に、隅部に相当する範囲の等高線が明瞭に屈曲しない点には、注意が必要である。いずれの隅部も方墳の角が落ちたような等高線を呈しており、これが墳丘の流失



第7図 廻原1号墳墳丘および周辺地形測量図

の影響によるものか、あるいは本来の形態を反映したものかは判然としない。

周辺地形 丘陵が北側から東側さらには南側をとりまき、北東から南西へと形成される谷の最奥部に古墳は位置する。したがって、墳丘から広く見通すことができるのは南西方向のみとなる。周囲からの見通しはきかず、また後背部を削り出すいわゆる山寄せの古墳と形容される立地を示す。

周辺地形をみると、北側斜面に小径が敷設されるものの、谷を形成する斜面における後世の改変は顕著ではない。ただし、墳丘の北側から東側に沿って丘陵斜面には弱い傾斜の変換があり、古墳の築造時に丘陵を加工した可能性を考慮できる。また、埋葬施設が開口する南側には、東側からまわり込む斜面との間に5 m程度の平坦部が存在する。この平坦部は墳丘の西側にまではそのまま連続しない。墳丘西側はさらに段差を隔てて平坦面が形成され、平坦面と段差を介しながら南西側へと徐々に標高を低くする。その状況から、墳丘南西側は後世において畑地として利用された可能性も想定される。

なお、今回の測量調査では、1号墳から南東側へ7 mほど離れた地点において5 m程度の小墳丘の存在を確認した。古墳時代の所産であるかの厳密な判断は難しいが、すでに10号墳までの存在が指摘されている点をふまえ〔島根大学考古学研究会 1976〕、ひとまずこれを11号墳と呼称しておく。

小 結 以上のように、墳丘や埋葬施設の主軸、墳丘の規模や形態、立地といった点から、廻原1号墳は典型的な終末期古墳と位置づけうる内容をもつ。そのいっぽう、埋葬施設の全体像の把握、墳丘構造の解明、墳丘の細部形態の検証など、発掘調査の課題も浮き彫りとなった。典型的な終末期古墳としての要素についても、畿内地域との関係という限定的な理解が可能であるかの検証も含め、廻原1号墳の出雲地域における位置づけを実証することが発掘調査の主たる目的となろう。(岩本)

註

(1) 本書では、古墳時代後期と終末期の区分について、王陵級の墳墓にみる前方後円墳の築造停止と大型方墳・大型円墳の採用という画期〔白石 1982〕を指標とする。したがって、畿内地域における最後の前方後円墳と目される五条野丸山古墳や平田梅山古墳から出土した須恵器を陶邑TK 43型式とみなしうる点から〔福尾・徳田 1994、徳田・清喜 1999〕、古墳時代終末期を陶邑TK 209型式期以降とする。出雲地域では、おおむね定型化した石棺式石室を採用する古墳の出現以降を終末期古墳と位置づけることとなる〔赤沢・広江 1987、大谷 1994・2001 ほか〕。

引用文献

- 赤沢秀則・広江耕史 1987「石棺式石室の構造と変遷」『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会 pp. 215-229
- 池淵俊一・稲田陽介ほか 2012『松江市廟所古墳発掘調査報告書(附 古曾志大塚古墳群、平廻古墳) 島根県古代文化センター調査研究報告書 45 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 出雲考古学研究会 1983「山陰における剝抜き「石棺式石室」について—特異な構造を有する3古墳の紹介—」『古文化談叢』第12集 発刊10周年記念論集 九州古文化研究会 pp. 333-341
- 出雲考古学研究会 1987『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会
- 梅原末治・石倉暉榮 1920「出雲に於ける特殊古墳(中の下)」『考古学雑誌』第11巻第3号 日本考古学会 pp. 1-14
- 江川幸子 1999『西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
- 江川幸子(編) 2011『キコロジ遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第138集 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
- 応知恭子・応知善雄 1966「東山陰地域のアルカリ玄武岩類の岩石学的研究(IV) —松江・米子地区の玄武岩類—」『岩石鉱物鉱床学会誌』第56巻第4号 日本岩石鉱物鉱床学会 pp. 141-156
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 pp. 39-82

- 大谷晃二 1996「出雲東部の横穴式石室」『山陰の横穴式石室—地域性と編年の再検討—』第24回山陰考古学研究会集 pp. 20-29
- 大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 島根県出雲土木建築事務所・島根県平田市教育委員会 pp. 43-54
- 大谷晃二 2009「山陰の終末期古墳」『前方後円墳の終焉とその後』第12回中国四国前方後円墳研究会 中国・四国前方後円墳研究会 pp. 33-53
- 岡崎雄二郎ほか(編) 1990『鈿田遺跡・朝酌荒神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥C、D遺跡』(『島根県松江市松江東工業団地内発掘調査報告書』) 松江市・松江市教育委員会
- 岡崎雄二郎 2000『九日田遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第84集 松江市教育委員会
- 角田徳幸・守岡正司・原田敏照 1997「西山陰における古墳(群集墳)の終焉と火葬墓の出現」『古墳時代から古代における地域社会』第41回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会 pp. 64-74
- 桑原真治・丹羽野裕・角田徳幸・西尾克己 1987「出雲地方における後期古墳文化と石棺式石室」『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会 pp. 230-261
- 佐藤大介・松本一郎・亀井淳志 2011「島根県松江市、和久羅山デイスাইトの岩石記載と全岩化学組成」『地質学雑誌』第117巻第8号 日本地質学会 pp. 439-450
- 島根県教育委員会 1979～1992『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』I～IV
- 島根県教育委員会 1980～2003『西川津遺跡発掘調査報告書』I～IX
- 島根大学考古学研究会 1976「廻り原古墳群について」『菅田考古』第14号 島根大学考古学研究会 pp. 57-62
- 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997～2005『島根大学埋蔵文化財調査研究報告』第1～8冊
- 白石太一郎 1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 国立歴史民俗博物館 pp. 79-120
- 徳田誠志・清喜裕二 1999「欽明天皇 檜隈坂合陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第50号 宮内庁書陵部 pp. 100-123
- 仁木 聡 2003「出雲」『季刊 考古学』第82号 特集 終末期古墳とその時代 雄山閣 pp. 49-52
- 仁木 聡 2010「山陰地方における後期・終末期古墳の領域性」『出雲国の形成と国府成立の研究—古代山陰地域の土器様相と領域性—』島根県古代文化センター pp. 239-257
- 西尾克己 1995「古墳・横穴墓からみた古代社会—六、七世紀の出雲東部と西部の様相—」『風土記の考古学』3 出雲国風土記の巻 同成社 pp. 129-148
- 福尾正彦・徳田誠志 1994「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』第45号 宮内庁書陵部 pp. 82-109
- 東森市良 1970「朝酌の古墳文化」『研究紀要』第1号 松江市立女子高等学校 pp. 1-16
- 増田浩太・目次謙一ほか 2004『松江市東部における古墳の調査—廟所古墳・観音山古墳群・廻田古墳群—』島根県古代文化センター調査研究報告書23 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 松江市史編集委員会(編) 2012『松江市史』史料編2 考古資料 松江市
- 松本岩雄 1997「朝酌岩屋古墳・廻原1号墳」『古代出雲を歩く』山陰中央新報社 pp. 104-105
- 宮澤明久・内田律雄・伊藤徳広 2011『山辺遺跡・鞍切遺跡・米坂古墳群・貝先遺跡ほか』国道485号道路改築事業(松江第五大橋道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II 島根県教育委員会
- 森田喜久男(編) 2000『出雲国風土記の研究』II 島根郡朝酌郷調査報告書 島根県古代文化センター調査研究報告書7 島根県古代文化センター
- 山本 清 1964「古墳の地域的特色とその交渉—山陰の石棺式石室を中心として—」『山陰文化研究紀要』第5号 島根大学 pp. 43-73(1971『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会 pp. 343-373 に所収)
- 脇坂光彦 2008「広島終末期古墳研究その後」『古代学研究』第180号 古代学研究会 pp. 355-358
- 渡辺貞幸(編) 2012『松江市手間古墳発掘調査報告・薬師山古墳出土遺物について』島根大学考古学研究室調査報告第3冊 島根大学法文学部考古学研究室